

物流DXの進め方②

アSEND

社長 日下 瑞貴

DX（デジタルトランスフォーメーション）の推進は、運送業界の発展に必要な不可欠な要素です。狭義のDXとは、「デジタル技術によって経営を革新することであり、業務プロセスのデジタル化（デジタルイノベーション）、アナログデータのデジタル化（デジタルイノベーション）とは区別されるものです。本来の意味でのDXの実現には、相応の時間・人員・資金が必要となるため、現行業務と並行して、一足飛びにDXを進めることは困難であることも現実です。今回は

「デジタル化」第一歩

小さな改革重ね近道



ク、ビデオ会議システム（ズーム、チームズ）などの導入がこれに当たります。あくまで単発でのデジタル化になるため、生産性向上のインパクトは限定的ですが、比較的取り組みやすいため、改革の機運となり、変化への慣れを育むことができます。

DXの全体像について解説し、「DXの第一歩としてのデジタル化」という考え方を紹介します。

DXとはデジタル化（デジタルイノベーション）、デジタルイノベーション、デジタルイノベーション、デジタルイノベーションの四つの軸で整理したのが下の図になります。

| | 未着手 | デジタルイノベーション | デジタルイノベーション | DX |
|--------------|------------|----------------|-----------------|-----------------|
| プラットフォームレイヤー | システムなし | 従来型プラットフォームの整備 | オープンプラットフォームの整備 | DX第2スコア |
| ビジネスモデルレイヤー | 物理サービスのみに | 効率的な物流サービス | データによる新たな収益源確立 | ビジネスモデルのデジタル化 |
| 製品/サービスのレイヤー | 非デジタルサービス | 物流データの形成・蓄積 | 物流データ統合など | データを基盤とする輸送サービス |
| 業務レイヤー | 電話などでのやりとり | 単純業務のデジタル化 | 業務プロセス全体のデジタル化 | 経営全体のデジタル化 |

次いでデジタルイノベーションとは、業務プロセス全体をデジタル化し、物流データの統合管理や、それに伴うサービスの付加価値化を目指す取り組みです。例えば、文書管理などは、受発注システムを導入することで受注から請求までの管理業務全体をデジタル化することや、配車シ

も増えることが想定されるという考え方が必要になります。具体的には、身近で比較向上とといった取り組み（荷主への輸送ステータスの連携、ASN連携による検品レスなど）も検討していくことができます。最後がDXです。営業、運行管理、経理、労務の各業務をIT（情報技術）ツールでの運営に切り替え、データに基づき経営的な意思決定を行う体制を整えることがDXです。具体的には「効果」ではなく、継続的に改革を推進していく「姿勢」をトップが明示し、現場に改革の「経験」を蓄積する点にあります。デジタル化を目的とするでも、無目的に改革を進めるのではなく、大きな改革に向けた初手としてデジタル化を推進していく姿勢が求められています。